

コーケンネオブレス (スピーチタイプ)

再使用禁止

【警告】**

- 1) 気管切開術後に皮膚から気管へのルートが確立していない時には、再挿管が困難となる場合があるので注意すること。なお、詳細は【使用上の注意】[重要な基本的注意]の1)及び2)を参照のこと。
- 2) 本品を呼吸回路等と接続する場合は、確実に接続されていること(リーク、閉塞、接続が緩いなどの問題がないこと等)を確認すること。[接続が不完全な場合、換気障害等を引き起こすおそれがあるため。]なお、詳細は【使用上の注意】[重要な基本的注意]の10)を参照のこと。
- 3) 本品を介して高濃度酸素を投与している場合は、本品の使用部位の近傍でレーザーメスや電気メスを原則として使用しないこと。[酸素中では突然発火したり、発火による気道熱傷等のおそれや有毒ガス発生のおそれがあるため。]
- 4) スタイレットが挿入された状態では換気ができないため、挿管直後に必ず取り除くこと。
- 5) 発声訓練を行う際は、本体の側孔が開放されていることを内視鏡などを用いて確認すること。開放されていない場合は、訓練を中止するか、もしくはその他の手段(例：異なるタイプの気管切開チューブの使用等)を検討すること。[呼吸が排出されず換気不全に陥るため。]
- 6) 内筒装用時に吸気や呼気を妨げるもの(栓や発声バルブなど)を使用しないよう注意すること。[気道閉塞が生じるため。]
- 7) 上気道の異常や分泌物の増加などによって気道閉塞のおそれがある場合には、キャップ及びワンウェイバルブを使用しないこと。

【禁忌・禁止】**

【併用医療機器】**

- ・本品をノーマンエルボー・タイプ(コネクタ内部のガス供給用内筒が患者方向に突出した形状)のコネクタに接続しないこと。なお、詳細は【使用上の注意】の[相互作用(他の医薬品・医療機器等との併用に関すること)]を参照のこと。

【使用方法】**

- ・再使用禁止

【形状・構造及び原理等】**

【形状・構造】**

本品は、ポリ塩化ビニル製(可塑剤：フタル酸ジ(2-エチルヘキシル))の気管切開チューブである。内筒が付属しており、内筒は取りはずして交換できるため清潔を保ちやすく、また、吸引のルーメンがカニューレ本体に内蔵されているので気管切開口や粘膜への刺激が軽微である。さらに、本品は内筒をはずし、ワンウェイバルブ(一方通行弁)を装着することで発声訓練及び発声ができる。

※シールバルブ：一部、金属を使用

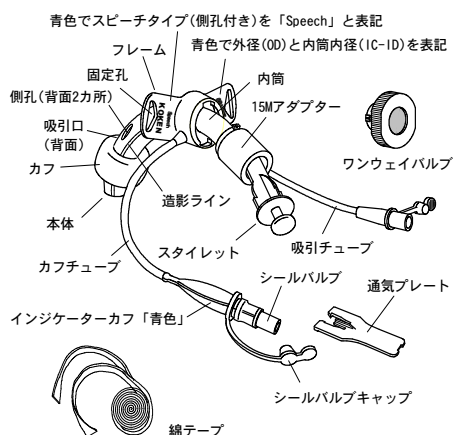


表1：製品番号と規格

製品番号	外筒(外径)	外筒(内径)	内筒(内径)
# 3261	8 mm	6.5 mm	5 mm
# 3262	9 mm	7 mm	5.5 mm
# 3263	10 mm	8 mm	6.5 mm
# 3264	11 mm	8.5 mm	7 mm
# 3265	12 mm	9.5 mm	7.5 mm
# 3266	13 mm	10 mm	8.5 mm



(別売品)

・ワンウェイバルブ

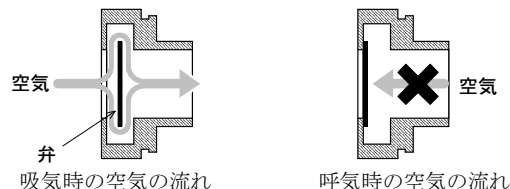
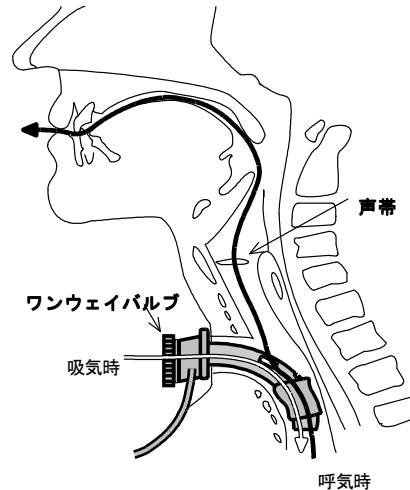
製品番号	規格
# 3794N	全サイズ共通

・コーケンネオブレス内筒

製品番号	規格	内径
# 3281	外筒(外径) 8 mm用	5 mm
# 3282	外筒(外径) 9 mm用	5.5 mm
# 3283	外筒(外径) 10 mm用	6.5 mm
# 3284	外筒(外径) 11 mm用	7 mm
# 3285	外筒(外径) 12 mm用	7.5 mm
# 3286	外筒(外径) 13 mm用	8.5 mm

【原理】

本品は内筒をはずし、ワンウェイバルブを装着することで、呼吸を側孔より声帯へと導き、発声訓練及び発声が可能となる。



【使用目的又は効果】

本品は低圧カフの気管切開用カニューレである。気道を確保するために、気管切開後に患者の切開口から気管に挿入するものである。カフを膨らませカニューレと気管の隙間をシールすることで、空気等を強制的に肺に送り込むことができる。また、術後の血液や分泌物が肺に入り込むのを防ぐ等の役割もある。本体にワンウェイバルブを取り付けることで発声訓練及び発声に使用することができる。

【使用方法等】**

【A. 使用前】**

1) 「表 1：製品番号と規格」を参照し、適切なサイズ選定を行う。

＜注意＞

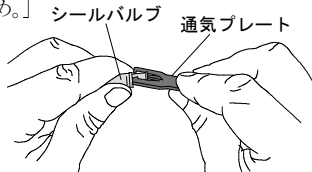
- ①他社製品から本品への移行時には呼称及び表示の差異に注意すること。〔不適切なサイズ選定により、事故除去や呼吸困難に陥るおそれがあるため。〕
 - ②収縮時のカフの厚みも考慮に入れること。〔気管切開孔に挿入しにくいときがあるため。〕
- 2) カフ等を傷つけないよう注意してパッケージから本品を取り出す。
- 3) 内筒を時計回りの方向に回し、カチリと手応えあるところまで回しロックする。

＜注意＞

- ①内筒が確実にロックされていることを確認すること。〔内筒は、出荷時にロックされていない。ロックが不十分だと内筒が抜けるおそれがあるため。〕
 - ②90°以上無理に回さないこと。〔製品が破損し、内筒が抜けやすくなるため。〕
- 4) カフ、インジケーターカフ、カフチューブ、シールバルブに機能不良（リーク・閉塞）がないことを使用前にテストすること。

＜注意＞

- ①使用前に必ず通気プレートを取りはずし、廃棄すること。〔通気プレートは製造時にカフが変形するのを防止するための部品であり、取りつけた状態で使用すると空気漏れを起こすため。〕
- ②通気プレート取りはずしの際は、下図のように通気プレートとシールバルブを持ち、折り曲げるようにして取りはずすこと。〔通気プレートを無理に引っ張ると、インジケーターカフが破損するおそれがあるため。〕



- ③鉗子や鋏のような鋭利な器具を周囲に置かないこと。〔カフは、薄くて鋭利なものとの接触により破損するおそれがあるため。〕
- 5) 本体先端側からフレーム側に空気を徐々に移動させながらカフ内の空気を完全に抜き取る。

【B. 挿管するとき】**

1) 潤滑剤（塩酸リドカインゼリー等）をカフ及びスタイレットと本体の先端等の突出部に薄く塗布し、気管切開孔より気管内に挿管する。

＜注意＞

- ①挿管の際に使用する器具（鉗子等）や体内突起物（軟骨等）でインジケーターカフ及びカフチューブを傷つけないように注意すること。
 - ②挿管する際、スタイレットは、装填されたままにしておくこと。〔挿管を容易にするため。〕
 - ③潤滑剤で本体内腔を閉塞しないこと。〔気道を確保できないことがあるため。〕
 - ④予期せぬ再挿管に備えて本品の予備を近くに用意しておくこと。
- 2) 正しく挿管された後、速やかにスタイレットを抜去する。
- 3) 綿テープ等をフレームの固定孔に取り付け、頸のまわりに固定する。
- 4) シリンジを用いてカフを膨らませる。カフ内の圧力は市販のカフ圧計等で測定した場合 27～33hPa (20～25mmHg) 程度が適切と言われているが、計測できない場合にはインジケーターカフの膨らみ具合を参考にする。

＜注意＞

- ①カフ内圧は気管をシールできる最小限の空気注入量により管理すること。〔カフへの過剰な空気注入はカフ破損や気管損傷・壊死の原因になるため。〕（【主要文献】1）参照

- ②33hPa (25mmHg) 以内のカフ圧で気管壁を密閉できない場合は、カフの空気を抜き、再度カフに空気を入れる。再度行ってもできない場合は、より大きなサイズの本品を用意すること。〔カフのサイズが不適切か、あるいはカフが十分に膨らんでいないため。〕
 - ③カフへの空気の注入・脱気を行う際は、以下に注意すること。
 - ・シールバルブに異物を混入させないよう清潔なシリンジやカフ圧計を用いること。〔シールバルブに異物（乾燥した体液や糸くずなど）が挟まり、カフが膨らまないおそれがあるため。〕
 - ・シールバルブにシリンジやカフ圧計の先端をしっかりと押し込むこと。〔挿入が浅いと、空気の注入・脱気ができないことがあるため。〕
- 5) 患者の換気状態を確認する。

＜注意＞

- ・呼吸困難等の換気不全の症状がないことを観察する。

【C. 挿管しているあいだ】**

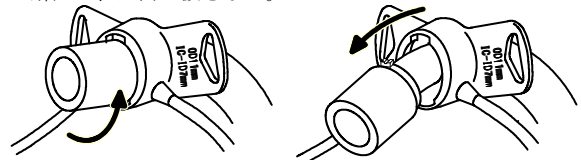
患者の十分な観察と管理を行う。

＜注意＞

- ①カフはときどき空気を抜いてしばませること。〔カフが気管粘膜を圧迫し続けると、気管粘膜が損傷するおそれがあるため。〕
- ②本体内側に付着した分泌物等を取り除くため、適宜内筒を抜き取り交換すること。併せて本体内側及びロック部も吸引等を行い清潔を保つこと。（【D. 発声訓練するとき（部品の着脱のしかた）】参照）
- ③内筒を再挿入する際には、必ず、直前に本体内側の吸引を行うこと。〔チューブ内側に付着した分泌物等を気管内に落とししてしまうおそれがあるため。〕
- ④カテーテル等を用いて気管及び気管支内を吸引する際には、内筒を本体に入れてから行うことが望ましい。〔カテーテル径が小さいと、側孔よりカテーテル等が飛び出し、気管粘膜を傷つけるおそれがあるため。〕
- ⑤人工呼吸器等と装着している間は、確実に接続されていることを確認すること。また、内筒と本体のロックが確実にされていることを確認すること。〔長期間負荷を掛けた状態で接続すると変形し、ロックがはずれるおそれがあるため。〕
- ⑥カフへの空気の注入及び使用中のカフ圧は、カフ圧計を用いるなどの方法で定期的に確認し、適切に管理すること。
- ⑦人工呼吸器等からの取りはずしが困難な場合は、チューブ取り外し用ウェッジ等を用いることを推奨する。〔取りはずし時の患者への負荷を低減するため。〕

【D. 発声訓練するとき（部品の着脱のしかた）】

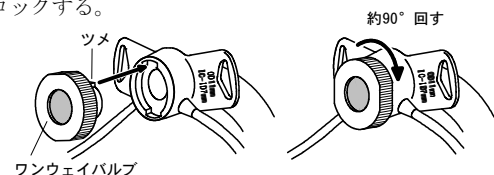
- 1) 内筒を抜き取る前にカフの上に貯留した分泌物等の液体を吸引チューブから吸引する。内筒を抜く際に貯留した分泌物等が側孔から本体内側に落ち込むことがある。
- 2) フレームを持ち、内筒を反時計回りの方向に約 90° 回しロックを解除し、内筒を抜き取る。



3) 本体内側に付着した分泌物等をカテーテル等で吸引する。

＜注意＞

- ・分泌物や誤嚥の少ない患者であれば、カフから空気を抜くことができる。〔気管粘膜にかかる圧力を軽減するため。〕
- 4) 付属のワンウェイバルブのツメを本体の溝に合わせて差し込み、時計回りの方向に約 90°、カチリと手応えのあるところまで回しロックする。



<注意>

- ①発声するとき以外は、内筒を挿入したままで使用すること。
[本体内側に分泌物等の汚れが付着するのを防ぐため。]
- ②意識が明確な患者に使用し、睡眠時は、ワンウェイバルブをはずすこと。[ワンウェイバルブは、発声訓練を目的としているため。]
- 5)内筒を戻す際は、逆の手順で行う。

<注意>

- ・内筒を再挿入する際は、必ず直前に本体内側の吸引を行うこと。
[チューブ内側に付着した分泌物等を気管内に落としてしまうおそれがあるため。]

[E. 抜管するとき]**

- 1)カフの上に貯留した分泌物等の液体を吸引チューブから吸引する。
- 2)シリンジにてカフから空気を完全に抜き、本体をゆっくりと引き抜く。

<注意>

- ①肉芽が引っかかり本品が抜け難くなったり、出血したりするおそれがあるため、抜管の際はゆっくり慎重に引き抜くこと。
- ②抜管後、呼吸困難等の換気不全の症状がないことを観察すること。
- ③抜管後の換気不全に対し、速やかに気道確保を行うために、気管挿管等の準備を整えておくこと。

【使用上の注意】**

【重要な基本的注意】**

- 1)本品が抜けないう、綿テープ等を用いて適切に固定すること。
[固定の緩みにより、チューブが気管から逸脱したり、チューブの位置がずれるおそれがあるため。]
- 2)気管切開術後は、本品が抜けないうしっかりと固定できるような処置を講じること。また、切開術後や事故除去等により再挿管する際には、皮下に異所留置したり、挿管が困難となる場合に備えて、緊急気管挿管等の準備を整えておくこと。
- 3)小児や意識障害患者、認知症患者等、意思表示の困難な患者に使用する場合には、気道閉塞の発見が遅れるおそれがあるため、厳重に観察すること。
- 4)人工呼吸器による厳密な呼吸管理が必要な患者には使用しないこと。
[本品(側孔ありの気管切開チューブ)の内筒と外筒との間には微小な隙間があり、吸気ガスが上気道等に漏れるため。]
- 5)チューブ内側の分泌物の凝固を最小限にし、気管粘膜の損傷を防ぐため、患者の気道を適切に加湿すること。
- 6)チューブ内側に付着した分泌物等による閉塞を防ぐため、適宜、吸引を行うこと。
- 7)吸引チューブから分泌物等を吸引する時には、必要最小限の吸引圧で行うこと。
[高い吸引圧では、気管粘膜が本品の吸引口に吸い込まれて損傷することがあるため。]
- 8)吸引操作後にカフ内圧及び呼吸管理状態が適切であることを確認すること。
- 9)本品に呼吸回路等を接続する場合には、本品に過剰な力がかからないように注意すること。
[本品の気管からの逸脱、呼吸回路との接続外れ、本品又は呼吸回路の閉塞等の原因となるため。]
- 10)カフチューブ及びインジケータカフを引っ張らないこと。
[故障又はリークの原因となるため。]
- 11)シールバルブに三方活栓や輸液用延長チューブ等を接続しないこと。
[三方活栓等を取りはずす際にバルブが破損し、カフ内へ空気が注入や脱気が不能となることがある。]
- 12)カフ内圧を測定する前に、カフチューブ及びインジケータカフ等に液体が溜まっていないことを確認すること。
[水蒸気がカフ膜を透過しカフ内部で凝結する事象が報告されている。カフチューブに凝結した水滴により水封され、カフ内圧を正確に測定できないことがあるため。]

- 13)本品を挿管または抜管、及び位置補正を行う前には、カフから空気を完全に抜くこと。
[気管と気管切開口を損傷するおそれがあるため。]
- 14)カフを脱気する前に、カフ上部に貯留した分泌物を吸引すること。
[カフの脱気時、肺に分泌物が流入するおそれがあるため。]
- 15)カフが脱気できない事態が発生した場合には、カフチューブを切断し、脱気すること。
- 16)本品を挿管した直後及び留置中は、分泌物、気管壁との接触、肉芽、皮下組織等によってチューブや側孔が閉塞することがないように、定期的に側孔の位置と側孔が常に開放状態にあることを、患者の換気状態や内視鏡等の機器で確認すること。
- 17)ネブライザ治療や加湿、またはシャワー等を行う際は、ワンウェイバルブをはずすこと。
[一方弁に薬液等が付着して動きにくくなり、吸気抵抗が上がり換気できなくなるおそれがあるため。]
- 18)患者の状態、局所の変化並びに本品の汚れ等の状態に応じて、新品と交換すること。
- 19)「コーケンネオプレス」では、それぞれのタイプで適用が異なるので適正使用推進のため次表を参照すること。

	適用	内筒側孔	ラベル	フームの表記と文字色	インジケータカフ	
単管タイプ	レスピレーター等との接続による厳密な呼吸管理が必要な患者	なし	なし	緑色	Single-Tube 緑色	緑色
複管タイプ	痰が多く、チューブが閉塞しやすい患者	あり	なし	白色	Double-Tube 黒色	透明
スピーチタイプ	誤嚥が少なく、発声訓練を行う患者	あり	あり	水色	Speech 青色	青色
ダブルサクシオンタイプ	レスピレーター等との接続による厳密な呼吸管理が必要な患者 チューブ内側に貯留した分泌物等を内部吸引チューブから吸引可能	なし	なし	黄色	W-Suction オレンジ色	オレンジ色

- 20)本品使用中に摂取物等の誤嚥に注意すること。
[内筒挿入の有無に係わらず、摂取物等が側孔から肺に流入したり、側孔に詰まって気道を確保できなくなったりするおそれがあるため。]
- 21)吸引チューブからの持続的吸引は行わないこと。
[気管内に唾液を引き込む原因となるため。]
- 22)開封後、何らかの事情で直ちに使用しない場合には、再滅菌せずに廃棄すること。
- 23)付属及び別売のワンウェイバルブ(承認番号:20800BZZ00234000)は本品専用であるのでこれと組み合わせて使用すること。
[側孔のない「コーケンネオプレス(複管タイプ)」に取り付けると気道が閉塞されるため。]

【相互作用(他の医薬品・医療機器等との併用に関する事)】**
1)併用禁忌(併用しないこと)

医療機器の名称等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ノーマンエルボー・タイプ(コネクタ内部のガス供給用内筒が患者方向に突出した形状)のコネクタを有する医療機器	本品と接続しないこと。	本品を閉塞させ、肺の過膨張や換気不能を発生させるおそれがある。

2)併用注意（併用に注意すること）

医療機器の名称等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
レーザー治療器 電気手術器	本品を介して高濃度酸素を投与している場合は、本品の使用部位の近傍でレーザー治療器（レーザーメス）や電気手術器（電気メス）を原則として使用しないこと。	酸素中でレーザー治療器（レーザーメス）・電気手術器（電気メス）を使用すると、突然発火したり、発火による気道熱傷等のおそれや有毒ガス発生のおそれがある。
磁気共鳴画像診断（MRI）	本品のシールバルブを走査エリア外に置くこと。	シールバルブ内のスプリングが画像に影響を与えることがある。
高気圧酸素治療装置	カフの収縮・膨張に注意すること。	吸気のリークや気管損傷のおそれがある。

- 4)「気管カニューレの種類と使用上の留意点（1）」堀口利之、鈴木康司：訪問看護と介護 3（2）135-140, 1998
 5)「気管カニューレの種類と使用上の留意点（2）」堀口利之、鈴木康司：訪問看護と介護 3（3）219-222, 1998
 6)「スピーチカニューレのバルブが高炭酸ガス血症を招いた症例を経験して」；佐藤亜矢，菊地佑実，橋本正治：秋田理学療法 16（1）69-73，2008

【文献請求先】**

株式会社 高研 営業企画部
TEL 03-3816-3500

【製造販売業者及び製造業者の氏名又は名称等】**

【製造販売元】**

株式会社 高研
TEL 03-3816-3500

【製造元】

株式会社 高研

【不具合・有害事象】**

本品の使用中に次の事象が起こることがある。使用期間中は十分な観察を行い、このような場合には本品の使用を中止し、適切な処置を行うこと。

1)重大な不具合

穴、折れ、切断、破裂、外れ、潰れ、事故抜去、狭窄、詰まり、漏れ、異所留置、誤接続

2)その他の不具合

キズ、剥離、異物混入、拡張不能、収縮、収縮不能、抜去不能、緩み、捻れ、凹み

3)重大な有害事象

肺炎、換気不全、呼吸不全、壊死、穿孔、気道閉塞

4)その他の有害事象

発赤、炎症、感染、発熱、喉頭狭窄、誤嚥、呼吸困難、潰瘍、出血、損傷、咳、痛み、痒み、気道狭窄、気道粘膜の虚血、喘鳴、肉芽形成、癒痕形成、びらん

【その他の注意】**

- 本品に、噴霧式表面麻酔剤（リドカイン噴霧剤等）を直接噴霧しないこと。[製剤の添加物により、カフが変形・破損するとの報告があるため。]（【主要文献】2）参照
- 亜酸化窒素が混合するガスを使用する麻酔を行う際は、カフの収縮や膨張に注意すること。[亜酸化窒素がカフを透過し、カフ内圧が上昇し気管が損傷したとの報告があるため。]（【主要文献】3）参照
- 院外で本品を使用する際、医療従事者は本品の取扱者に必ず安全な使用方法と操作方法の説明を行うこと。

【保管方法及び有効期間等】**

【有効期間】**

3年 [自己認証（当社データ）による。]

【主要文献及び文献請求先】**

【主要文献】**

- Carroll, R.G. and Grevik, K. : Proper use of large diameter, large residual volume cuffs. Critical Care Medicine Vol.1, No.3: 153-154, 1973
- K. D. Jayasuriya, W. F. Watson : P.V.C. Cuffs and Lignocaine-base Aerosol. British Journal of Anaesthesia 53:1368, 1981
- 平川紫織，北野敬明，岩坂日出男，野口隆之，宇野太啓：各種ガスバリア型気管チューブの有用性の検討。 臨床麻酔 Vol.23 / No.9, 1999-9